

2014. 12

〈特別寄稿〉

『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考—』補論 清水 有子 ... 1

〈論文〉

The Hizen ware in the Philippines: Its historical and archaeological significance
..... ニダ・T. クエバス ... 11

Naufragio, colonización y comercio:
relaciones entre Filipinas y Taiwán en los siglos XVI y XVII
..... 方 真 真 ... 33

メノアメリカ考古学における日本人研究者
..... 市 川 彰 ... 51

Dinámicas de interacción en la transición del Formativo al Clásico:
Los resultados preliminares del Proyecto Arqueológico
Tlalancaleca, Puebla 2012-2014
..... 嘉幡茂／村上達也／フリエタ・M.= ロペス・J.／
..... ホセ・ファン＝チャベス・V. ... 73

メキシコ・ゲレロ州海岸山岳地域の共同体警察による代替的司法の挑戦(前編)
..... 小 林 致 広 ... 107

Anton Chino:
A diáspora de um escravo de Cochim pelo mundo luso-espanhol dos séculos XVI e XVII.
..... マリア・デ・デウス・ペイテス・マンソ／ルシオ・デ・ソウザ ... 121

16世紀ニカラグアにおける造船拠点の成立条件に関する考察
..... 立 岩 礼 子 ... 133

〈研究ノート〉

氾濫するドラッグの中で人生の偶発性と向き合えるか
—経済発展を続けてきたブラジルでドラッグの合法化を考える
..... 高 橋 慶 介 ... 151

〈調査研究報告〉

ニカラグア学術調査報告「2014夏期調査」—アメリカ地中海文化圏研究へのアプローチ—
..... 辻 豊 治／南 博 史 ... 161

No.

14

〈ARTÍCULO INVITADO〉

A supplement of *Kinsei nihon to Luzon*..... Yuko Shimizu ... 1

〈ARTÍCULOS〉

The Hizen ware in the Philippines: Its historical and archaeological significance
..... Nida T. Cuevas... 11

Naufragio, colonización y comercio:
relaciones entre Filipinas y Taiwán en los siglos XVI y XVII Chenchen Fang ... 33

Japanese Scholars in Mesoamerican Archaeology Akira Ichikawa ... 51

Dinámicas de interacción en la transición del Formativo al Clásico:
Los resultados preliminares del Proyecto Arqueológico
Tlalancateca, Puebla 2012-2014
Shigeru Kabata/Tatsuya Murakami/
..... Julieta M. López J./José Juan Chávez V. ... 73

Los desafíos de la justicia alternativa por la CRAC-PC de La Costa-Montaña de Guerrero,
México (Primera parte) Munehiro Kobayashi ... 107

Anton Chino:
A diáspora de um escravo de Cochim pelo mundo luso-espanhol
dos séculos XVI e XVII. Maria de Deus Beites Manso/Lúcio de Sousa ... 121

El Realejo y sus condiciones como el puerto próspero durante el siglo XVI
..... Reiko Tateiwa ... 133

〈NOTA Y COMENTARIOS〉

Facing the contingency of life in the overflow of drugs:
Rethinking the legalization of drugs and economic growth in Brazil
..... Keisuke Takahashi ... 151

〈NOTAS DE INVESTIGACIÓN〉

Informe sobre la investigación académica de Nicaragua [Investigación de verano, 2014]
—para estudios del área cultural del Mar Mediterráneo Americano—
..... Toyoharu Tsuji/Hiroshi Minami ... 161

〈研究ノート〉

氾濫するドラッグの中で人生の偶発性と向き合えるか

—— 経済発展を続けてきたブラジルでドラッグの合法化を考える ——

高橋慶介

キーワード

ブラジル, ドラッグ, 貧困, 合法化, 偶発性

Abstract

Now Brazil has become one of the biggest drug markets in the world. Even in Bahia, the Brazilian poor state, the drug trafficking is widespread with the national economic growth. In recent years, the regulation of the drugs was revised in the way that the drug users are fined some community services in place of imprisonment. Behind this legal revision, there is a recognition that it is urgent and crucial to prevent the organized crimes. That is a common drug policy in Latin American countries. In those countries, even the legalization of the drug use has been discussed as an efficient option for revealing the distribution of drugs.

However, as some fieldworkers have revealed, the drugs are not always distributed in a single social situation. Then, whether the drug use will be legalized or not, it is essential for the new drug policy to conduct many experimental researches, questioning concretely how, through whom and with which the drugs spread in society. Such researches will lead us to reconsider the previous discourses which ascribe the overflow of the drugs exclusively to the poverty or the social inequality.

I 『シダージ・ジ・デウス』の世界がやってきた

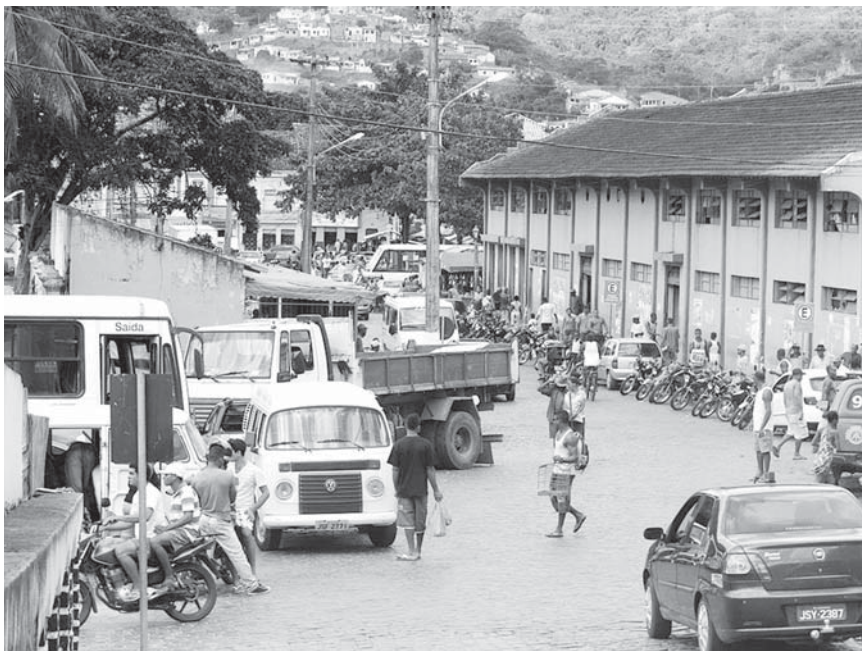
映画『シダージ・ジ・デウス（邦題：シティ・オブ・ゴッド）』（2002）は、1980年代のリオデジャネイロのスラムの日常を、ギャングの抗争での残虐さや悲惨さを軸としつつも、軽妙な音楽とユーモアを交えて描いている。数々の国際映画祭にノミネートされており、ブラジルのスラムやギャングを世界的に知らしめた作品である。

2014年2月、筆者が二年ぶりに訪れたバイア州カショエイラ市で起きた治安の変化について、インフォーマントのTは、この映画に例えて説明してくれた。バイア州は、国内でも黒人人口比率の高い州として知られ、筆者はカショエイラ市周辺でブラジルにおけるアフリカ文化の影響や人種問題についてのフィールドワークを実施してきた。以前は、夜遅くになっても、子どもたちが道端を走り回り、若者たちが階段や道路脇に腰掛けてギターを奏でながら語り合っていた。そうした光景は、街灯が増設されたにもかかわらず、ここ数年で昔話になってしまったのである。

ほら、見てみると、Tが指差した家々のドアと窓は、既に鉄格子で覆われていた。この周辺では、かつて富裕層の邸宅でしか見かけることがなかったものだ。その原因は、ドラッグの密売をめぐってギャングが形成されたことにある。

ブラジルの大都市の光景はここ10年で様変わりした。6車線の幹線道路には終日、新車の列が立ち往生している。新興住宅地には建設中の高層住宅がそびえ立っている。ショッピングセンターには最新の家電が隙間なく陳列されている。貧困地方とされてきたバイア州の田舎町でも、丘上には電気の明かりが灯り、街中にはバイクが溢れかえり、通りには模造品ではなく正規品のスニーカーを履いた通行人が行き交っている。

本論では、経済発展を続けてきた今日のブラジルで流通し、あふれるこれらのモノの中でも、ドラッグ、特にコカイン及びその合成物であるクラックの現状と、政府によるドラッグ政策の変化について報告する。今日のブラジル連邦政府は、コカインやクラックの乱用への対策を講じる上で、ドラッグ使用に対する懲罰方針を見直している。近年のラテンアメリカで活発化しているドラッグの合法化論を受けたものである。その対策の効果を判断するには時期尚早であるが、転換するドラッグ政策自体の方向性は検証可能である。そこで、ブラジルにおけるドラッグ乱用の現状、及び合法化論の争点とそれに対する反論について、筆者のフィールドワークのエピソードを交えながら報告する。その上で、新たなドラッグ政策にフィールドワークを踏まえた実証研究に連なる方向性が見られる点を指摘し、その射程を論じてみたい。



[写真1] バイクが立ち並ぶカシオエイラ市 (2014年3月筆者撮影)

II チラピアと呼ばれる男

後にチラピアと呼ばれるようになる男は、父系親族が多く住むカショエイラ市P地区の出身である。両親を同じくする兄弟はいない。父親は、チラピアが幼い頃に家を出て、他の地区で別の家族を作って暮らしている。一方、母親は、父親と別離後も、チラピアとともにP地区に留まった。母親が雑貨店員として働いている間にチラピアの面倒を見ていたのは、父系親族であった。2004年、フィールドワークのためにP地区へとやってきた筆者と入れ替わるように、母親は恋人の住む市外に転居したが、チラピアはP地区の祖父母宅に残った。

筆者が長期のフィールドワークを実施していた頃、チラピアは10代半ばで、日中は学校に通い、日暮れになるとボールを蹴りに広場に現れる少年の一人であった。顔見知りだけの小さなコミュニティなので、強盗を働く「危険人物(perigoso)」は少なかったが、「厚顔な(descarado)」コソ泥、つまり、「鶏泥棒(ladrão de galinha)」はたびたび噂になった¹⁾。チラピアはどちらでもなかったが、興味本位でマリファナに手を出したとしても不思議ではなかった。マリファナの吸引は、若者にとって決して珍しい娯楽ではなかった。

2012年2月、P地区を再訪した筆者が最後にチラピアと会ったとき、少年の頃は華奢に見えた身体が二回りほど大きくなっていったものの、相変わらず友人たちと談笑し、サッカーにも興じる青年であった。低賃金ではあるが定期収入が得られる郊外の靴工場に勤め始めていた。タフな力仕事ではあったが、近所の友人たちと一緒に深夜勤務もこなした。P地区に恋人もおり、彼女の母親は大変チラピアのことを気にかけていた。

2013年に事件は起きた。いつものごとく友人たちと談笑する中、チラピアはその一人と口論を始めた。口論自体はよくあることだ。しかし、その日は収拾がつかなかったらしい。チラピアは一旦自宅に帰ると、警察官として働く親戚の一人が所有するリボルバーを携えて通りに戻り、口論相手に向けて発砲したのである。弾は逸れたが、チラピアはそのまま逃走してしまう。数日後、茂みに隠れていたチラピアは逮捕され、父親が雇った弁護士が仕事をするまでの数日間、拘留された。

この発砲事件がチラピアの人生の分岐点となった。その後、P地区の人々がチラピアを見かけることはなくなった。夜中、皆が寝静まった頃に、フルフェイスのヘルメットを被って足早に丘から駆け下り、別の丘へ向かう姿を見たという目撃例ぐらいである。普段はその丘の一つの茂みに潜んでいるのだろうと言われている。しかし、誰も自分の目で確かめてはいない。チラピアを知る何人がが小聲で述べるのは、2014年3月時点で、20代半ばのチラピアは、既に複数の丘を拠点とするギャングのボスとなり、警察からドラッグの密売のみならず、殺人(教唆)の疑いも持たれていることである。もし口論のときにもう少し辛抱していたならば、もし親族の一人が警察官でなかったならば、もし発砲事件後もP地区で暮らし続けるほど「厚顔な」性格であったならば。こうしたいくつもの「もし」が重なり、青年にはごくありふれたアフリカ産の淡水魚(ティラピア)に由来する呼び名が警察から与えられた。

III 経済成長とドラッグの氾濫

国連薬物犯罪事務所(United Nations Office on Drugs and Crime)の年次報告書は、近年、ブ

ラジルのドラッグ事情について特徴的な変化を指摘している。コカインの増加である [UNODC 2011: 109; 2012: 41, 79; 2013: 2, 13]。2010年に押収された27万トン、2004年の押収量の約3倍に相当する [UNODC 2012: 41]。サンパウロ連邦大学が2013年に公表した調査によれば、今日のブラジルのコカイン消費量は、世界全体の20%を占めるに至っている [Universidade Federal de São Paulo n.d.]。

Tは、カシオエイラ市から車で20分程度のクルス・ダス・アルマス市にある小さなバルでの出来事を語ってくれた。同市には、近年開校した国立大学、ヘコンカヴォ・バイアノ連邦大学の本部があり、バルは若者たちで賑わっていた。友人たちと入店した彼は、店員にビールを頼むと次のように注文を聞き返されたという。

『「ありビール (cerveja com)」、それとも『なしビール (cerveja sem)』?』

「あり (com) かなし (sem) か」をめぐるバル店員とのやり取りは、ブラジルでは、炭酸の有無を指定するミネラル・ウォーターの注文でよく見られる。しかし、このバルでTが有無を問われたのは、ビール瓶に被せる保冷ケースの底に仕込んで渡すコカイン袋のことであったという。

コカインはアンデス地方の伝統嗜好品であるコカの葉を原料としている。同地方に国境を接するブラジルへの流入自体は今に始まった訳ではないが、多くは欧米市場に向かうものであった [Boiteux et al. 2009: 38]。今日でもブラジルはコカインのグローバルな流通の一大経由地である。とりわけ、ヨーロッパやアフリカのポルトガル語圏に流れるコカインは、その多くがブラジルを中継点としており、2009年から2011年の間にポルトガルで押収されたコカインの6割以上はブラジルを経由していた [UNODC 2013: 43-44]。

一方、国内での押収量の増加は、経済成長を続けてきたブラジルがもはやコカインの単なる経由地ではなく、巨大な消費市場に変貌した事実を示す。国連薬物犯罪事務所の報告書は、ブラジルでは若年層を中心に可処分所得が増加し、それに伴ってコカインを含むドラッグ流通量も増加してきたと指摘する [UNODC 2012: 87]。カシオエイラ市でドラッグと言えば、「マコニャ (maconha)」、つまりマリファナが、「マリファナ常用者 (maconheiro)」とともに日常で耳にする言葉であった。確かに、筆者のフィールドワーク当初から既にコカインも流通していたが、マリファナに比べて高価で、簡単に入手できるものではなかった。それが今では、コカインを指す「粉 (farinha)」やクラックを指す「石 (pedra)」といった隠語が飛び交い、大麻常用者の代わりに「クラック常用者 (craqueiro)」という言葉が用いられる場面にしばしば出くわす。

カシオエイラ市の麻薬密売人たちは、乗り合いバスに小1時間ほどで到着する州第二の都市、フェイラ・ジ・サンタナ市ルートでドラッグを入手する。カシオエイラ市では廃屋、茂み、河川敷、日陰の小道などに「(入り)口」を意味する「ボカ (boca)」と呼ばれる密売所を構えて客を待つ。ボカへ向かう道には、若い少年たち、いわゆる「シス・ノヴィ (X-9)」が携帯電話を片手に見張っており、怪しい人物が通ったときは、ボカで顧客を待つ密売人たちに連絡が入る。ボカの近くには密売人がいつでも小道や崖道を逃走できるようにバイクが手配されている。見渡しの良い丘と農園に抜ける森に囲まれたカシオエイラ市は、警察や他のギャングから逃げるのに都合がよく、近隣の市に比べてボカも多い。



【写真2】カシヨエイラ市にある丘から別の丘を眺めた風景(2014年3月筆者撮影)

密売人は、ボカを中心とした縄張りを持っており、その縄張りの維持、拡大のために、ギャングを形成しやすい。カシヨエイラ市では、2011年に影響力のあるギャングのボスが逮捕されて以来、ボカを管轄するギャング間の対立が続いており、殺害されたギャングの遺体の写真が流布するという痛ましい出来事も起きている。その加害者と被害者はいずれも10代である。

IV ドラッグの克服と合法化

ブラジル連邦政府は、法務省の下に麻薬政策局 (Secretaria Nacional de Políticas sobre Drogas) を置き、ドラッグの氾濫への対策を積極的に講じている。2011年12月に開始された「クラック、克服することができる (Crack, É Possível Vencer)」キャンペーンは、コカインやクラックの常用及び売買をめぐる犯罪の減少を目的としたものである [Governo Federal do Brasil n.d.]。このキャンペーンは、「予防 (健康リスクの周知)」、「ケア (治療体制の確立)」、「取締り (ドラッグと密売の撲滅)」を柱として、教育、医療、治安に跨る包括的プログラムを策定するもので、2014年までに40億レアルの拠出を決定している。

ただし、地方政府の動きは遅く、パイア州も2013年ようやくキャンペーンに参加したばかりである。ゆえに、キャンペーンの具体化にはまだ時間がかかるだろう。2014年3月時点でカシヨエイラ市近郊に確認できるドラッグ関連の取り組みは、アルコール依存症患者の社会復帰を支援してきた民間の回復センターのみである。このように、現時点で、キャンペーンが抜本的なドラッグ対策となるか否かを判断できる段階にはない。今後、具体化されたキャンペーンは、その評価をめぐる政治的駆け引きを経ながら、効果が検証されるだろう。

一方、ブラジルにおけるドラッグ政策で注目すべきは、このキャンペーンが始まる数年前に大幅な変更が加えられたドラッグの売買に関する法的規制である。1976年の6.368号では、ドラッグの売買と使用の両方に刑期を科していた。だが、2006年の11.343号では、個人的使用として認められた場合、刑務所での服役が免除されることになり、教育プログラムへの参加や共同体奉仕活動に差し替えられた。つまり、ドラッグの使用を懲罰対象から除外したのである²⁾。現行のキャンペーンでも、ドラッグ依存に対する予防やケアが優先され、取締り分野では、ドラッグ使用者の摘発よりも、地域社会に根差した警察の組織化や関係機関の連携によるドラッグとその密売ネットワークの撲滅が強調されている。このドラッグ使用者に対する姿勢の変化は、ラテンアメリカ全体で議論が重ねられてきた新たなドラッグ政策にも共有されている。それは、組織犯罪を抑止する観点からドラッグの流通解明に力点を置き、そのためには「ドラッグの合法化」という選択肢も排除していない点である。

ラテンアメリカにおいてマリファナ使用の合法化は、古くから議論されてきたが、近年になって、大きな影響力を持ち始めている。例えば、2009年に三人の元大統領を共同代表とする「ラテンアメリカのドラッグと民主主義委員会 (The Latin American Commission on Drugs and Democracy)」から『ドラッグと民主主義：パラダイム・シフトに向けて』と題する提言書が公表された。三人とは、コロンビアのセサル・ガビリア (César Gaviria)、メキシコのエルネスト・ゼディージョ (Ernesto Zedillo)、そしてブラジルのフェルナンド・エンリケ・カルドーゾ (Fernando Henrique Cardoso) である。

同提言書には、「アメリカが採用してきた『禁止戦略』の不備とEUが従ってきた『害悪削減戦略』の利点と欠点を再検討する」とある [The Latin American Commission on Drugs and Democracy 2009: 3]。これは、とりわけアメリカが主導してきた政策で、薬物使用を禁止し、懲罰の対象とする従来の取り組みが、組織犯罪の抑止という点では十分な成果を上げてこなかった事実を受け入れて、EU諸国での取り組みを参考として革新的な代替案を模索することを意味している。具体的には、ドラッグ常用に至る患者と売買に携わる密売人とを分け、前者には懲罰ではなく回復プログラムを科す。また、ドラッグの売買をめぐる組織犯罪を抑止するためには、これまでタブー視されてきたドラッグの合法化を議論の俎上にのせて、ドラッグ売買の流通網の管理に乗り出すというものである。

合法化の検討や容認は、ブラジルが加盟する米州機構 (Organisation of American States) の中心課題でもある。2013年5月に公表されたレポートでは、アメリカ主導の下での従来のアプローチに代わって、「合法のおよび規制的代替案」を提示し、薬物の使用や売買を一律に犯罪とするよりも、合法化による入手方法や使用量の規制が、組織犯罪の抑止にはより効果的であるとしている [Organisation of American States 2013]。

こうしたドラッグ合法化の議論を受けて、ウルグアイの議会では、2013年末にマリファナの栽培と購入の合法化法案が可決され、禁止戦略を主導してきたとされたアメリカ国内でも、州レベルでは個人的な使用が合法化されるに至っている。

ただし、ブラジルでは反対論が根強く、現時点で、合法化へと国民の賛同を集約する段階には至っていない。今のところ、合法化の対象はマリファナに限定されているが、反対派が懸念するのは、このマリファナが「入門ドラッグ」となる危険性である。マリファナをめぐるのは、タバコやアルコールと比較して依存性が低く、他のドラッグよりも安全だとする主張がある。この主

張に基づき、リベラル派は、制限を最小限にすべきと、マリファナ解放を支持する。さらに、ドラッグには効能さえあるとして積極的に合法化を求める立場の人々は、乱用に気を付けて正しく使用しさえすれば、マリファナは使用者に束の間の休息を与え、その刺激は新たな創造性さえもたらすと主張する。一方、反対派は、マリファナの常用がより依存性の高く健康を害するドラッグの使用に繋がるとして、合法化を批判する。



[写真3] サンパウロ州サンパウロ市でのマリファナ合法化反対運動
(2011年12月筆者撮影)

V ドラッグをめぐる「要因」と社会環境

それでも、近年のブラジルにおけるドラッグ政策の変化は、合法化に至るか否かに限らず、ドラッグの流通に対する一般的な語り口、つまり「社会環境」言説を再考するのに十分なインパクトを持っている。というのも、組織犯罪の抑止を優先し、ドラッグの流通解明を焦点化する以上、ドラッグの流通を可能にする社会環境それ自体を問うことが前提となるからである。実際、現行キャンペーンで強調されていた関係機関の連携は、流通網の解明や解体を狙ったものである。ここでは、次のような問いと必然的に直面することになる。誰が、どのような経緯で、何を介してドラッグに誘われるのか。そのドラッグは密売者からどのように入手し、その密売者はいかにして密売を始めるのか。密売は、どのような組織化と対立を引き起こすのか。そして、密売をめぐる金銭は、誰と誰の間でどのように授受されるのか。ドラッグの流通解明には、こうした問いの中で、社会環境を具体的に解明することが必要となる。

では、そもそもこれまでドラッグをめぐる社会環境とはどのように語られてきたのだろうか。

今日、ドラッグの乱用と特定的人格や人種とを結びつける言説は、人種差別として斥けられるだろう。チラピアがギャングのボスへと駆け上がってゆく要因を求めるとすれば、彼の限りなく浅黒い肌ではなく、決して豊かではない母子家庭で育ち、思春期には母とも離別したという不遇なライフストーリーが挙げられるに違いない。ドラッグの生産、密売、消費は、このように貧困や経済格差といった社会環境と結び付けられる傾向がある。十分な収入源もなく、教育機会にも恵まれない社会環境が、ドラッグに手を染める人々（とりわけ密売人）を育てているとの説明を導きやすい。

こうしたドラッグをめぐる言説は、特定の人種とドラッグ犯罪との相関関係を想定せずに、ドラッグに携わる要因を人物本人ではなく、その人物をめぐる社会環境に求めている。ブラジルは人種差別の少ない国と言われてきたが、それでも黒人や混血に対する偏見や差別は根強い。人種差別的言説を回避する社会環境言説は、ブラジルの人種問題に対して一定の政治的効果をもたらすだろう。その一方で、社会環境言説もまたは、人種差別的言説に見られる決定論に接近する傾向がある。というのも、要因が貧困や格差という極めて限定された社会環境に収束しやすいからである。

ドラッグの流通をめぐる実証的調査は、こうした社会環境による素朴な決定論について、結果として、過度に単純化された貧困共同体像をその外部からいつまでも再生産してしまうと警笛を鳴らしてきた。リオデジャネイロ州において、ブラジルのスラム、つまり「ファヴェラ (favela)」でフィールドワークを重ねてきたアルバ・ザルアル (Alba Zaluar) も強調するように、ファヴェラでドラッグに手を染める住民は、決して多数派ではない [Gois 2004]。カシオエイラ市でも同様である。ドラッグの「関係者 (envolvido)」のネットワークは確かに広範にわたるが、たとえ貧しくともほとんどの住民は関わりを持たない。また、市内外で強盗を働くような危険な人物も、皆がドラッグの密売やギャング活動に携わる訳ではない。そうした事実を踏まえた上で、P地区近隣のギャングのボスに登りつめたのがチラピアであったことを考えると、その過程で生じたいくつもの「もし」、つまり「偶発性」を解きほぐすことなくして、ドラッグの流通の現実を解明できないはずである。

ドラッグの流通網の解明にも、こうした実証的な調査研究のような作業が求められるだろう。それは、貧困や格差といった社会環境として一括りにされがちなドラッグの生産、流通、消費の過程について、誰が、何を、どのようにという問いを発しながら、そして人生の偶発性と向き合いながら、明らかにする作業である。この作業は、解答の安易な一般化、つまり最大公約数や平均値を拒否し、迅速な対応策の捻出を不可能にする。結果的に判明するのは、ドラッグの流通の「法則なき法則」とでも呼びうるものかもしれない。

それでも、今日のブラジルにおけるドラッグの氾濫を考えるならば、こうした地道な作業が不可避免的に要請されていると筆者は考える。国連薬物犯罪事務所が指摘するように、ドラッグの流通は、貧困や格差だけでなく、今や可処分所得の向上とも結びついている。ブラジルの経済成長は、ドラッグを取り巻く社会環境自体に新局面をもたらしたのである。新たなドラッグ政策は、こうした社会環境の変化を踏まえて、ドラッグの流通をめぐる現実を問い直す必要がある。一方で、これまでの実証的調査の成果は、こうした社会環境の問い直し作業の参考となり、合法化への賛否は別として、組織犯罪抑止に貢献できるに違いない。

VI むすびにかえて

今日のブラジルにおけるドラッグの氾濫の只中に身を置くならば、人々の間で次々に起こる悲惨な事件を前にして焦燥感に苛まれるはずだ。ドラッグ氾濫に対する政府の政策や民間の取り組みについて「今後の展開が待たれる」などのコメントにとどめ、事態の経緯を見守るための時間も場所も残されてはいない。ただし、繰り返すが、実証的にドラッグの流通網を解明するという試みは、貧困や格差といった社会環境を持ち出すだけでは語れない、偶発性に満ちた人々の人生と向き合い続ける地道な作業である。

最後に、偶発性に加えて、この地道な作業から見えてくる光景を改めて想起すべきである。それは、今日のブラジルでのドラッグの氾濫がそれ単独ではなく、様々なモノがあふれる中で生起している点である。カシオエイラ市でのドラッグの流通で見たように、人々は貧困や格差といった予め用意された社会環境によってドラッグの流通の場に身を置くのではなく、むしろ銃器、携帯電話、バイク、そしてドラッグとの偶発的な出会いを通して、ドラッグ関係者の世界に誘われ、巻き込まれてゆく。ゆえに、ドラッグの流通網を解明するためには、その流通に身を置く人物がどのような経緯をもつのかという問いのみならず、ドラッグも含めたモノがどのように流通するのかをも問わなければならない。経済発展を続けてきた今日のブラジルで自由を得たのは、人間だけではないのである。

注

- 1) 近所のよその家の裏庭で放し飼いにされた鶏を盗んでは売り払ってしまうような軽微な窃盗行為に由来する。
- 2) ただし、警察の取り締まり現場において、使用者と密売人の区別は必ずしも明確ではなく、積極的な取り締まりの中で、かえって刑務所収容者が増加しているとの指摘もある [Organisation of American States 2013: 159]。

参考文献

Boiteux, Luciana, Ela Wiecko Volkmer de Castilho, Beatriz Oliveira Batista, Geraldo Luiz Mascarenhas Prado, Carlos Eduardo Adriano Japiassu

2009 *Tráfico de Drogas e Constituição*, Secretaria de Assuntos Legislativos do Ministério da Justiça, Brasília.

Duarte, Paulina do Carmo Arruda Vieira, Vladimir de Andrade Stempluk e Lúcia Pereira Barroso

2009 *Relatório Brasileiro sobre Drogas*, Secretaria Nacional de Política sobre Drogas, Brasília.

Gois, Antônio

2004 “‘Hipermasculinidade’ leva jovem ao mundo do crime”, *Folha de São Paulo* (12 de Julho), A12.

Governo Federal do Brasil

n.d. <http://www2.brasil.gov.br/crackepossivelvencer/home>

Organization of American States

2013 *The Drug Problem in the Americas: Legal and Regulatory Alternatives*, Organization of American States, Washington, D.C.

The Latin American Commission on Drugs and Democracy

2009 *Drugs and Democracy: Toward a Paradigm Shift*, s.l.: s.n.

United Nations Office on Drugs and Crime

2011 *World Drug Report 2011*, United Nations, New York.

2012 *World Drug Report 2012*, United Nations, New York.

2013 *World Drug Report 2013*, United Nations, New York.

Universidade Federal de São Paulo

n.d. <http://inpad.org.br/lenad/resultados/cocaina-e-crack/press-release/>

(ウェブサイトは全て 2014 年 9 月 20 日にアクセス確認した内容である)